

『乾隆四庫全書無板本』所收『江湖集』の鮑廷博校宋本識語について

芳村弘道

一 『江湖集』とその版本

南宋の都の臨安には出版業者が相列なる地區があり、そこを書棚と稱した。その版本は「書棚本」と呼ばれ、中國版刻史上に民間の營利出版が隆盛を迎えた時期の出版物として重要な位置を占める。中でも陳起・續芸父子の陳宅書籍鋪（陳解元書籍鋪なども稱した）は中・晩唐の詩人の別集を多種版行し、書棚を代表する書肆として著聞する。また陳氏父子は、當時の群小詩人の作品を彙編し、『江湖前集』『江湖後集』『江湖續集』という總集（以下『江湖集』と稱す）も相次いで出版した。『江湖集』に収録された詩人たちは「江湖派」と呼ばれ、中國文學史に特別の意味をもつ詩人群である。「江湖派」の特色としては、舊來の士大夫階層出身者のほか、市井の詩人も多數存在することが注目される（版元の陳起も詩人で『芸居乙藁』を『江湖集』に傳える）。南宋市民社會の成熟を背景にした市井詩人の輩出は、中國文學史上の畫期的現象といえる。『江湖集』は、南宋後期の詩壇の研究に必須の文獻であり、また近世市民社會における文藝のありかたを考察する上にも缺くべからざる資料である。^②

『江湖集』のテキストとしては、當然のことに先ず陳起・續芸の原刻本が挙げられる。陳氏父子が『江湖集』に編刻した詩人の數は、「百十六家」^③ともいわれるが確定しがたい。元・明兩代を経る間に、所收の詩集には傳來を絶つものが少なくなかったが、明末から清初に及んでなお約六十

種が遺存した。現在、原刻本としては、清の朱彝尊の舊藏にして、臺灣の國家圖書館の所藏本があり、これには五十六家の別集と陳起編『聖宋高僧詩選前・後・續集』『前賢小集拾遺』が傳えられている。この臺灣國家圖書館本は中華民國六十一年（一九七二）に臺北の藝文印書館から『宋槧南宋群賢小集』と題されて影印出版された。また宋本に基づく精妙な影鈔本が明末・清初の毛晉の汲古閣で作成され、遞傳の後、清末・民國の藏書家鄧邦述の群碧樓に歸し、民國十年（一九二二）に『汲古閣景鈔南宋六十家集』^④として上海の古書流通處から影印された。

『江湖集』は、陳氏編刻以後、民國期の『汲古閣景鈔南宋六十家小集』や近年の『宋槧南宋群賢小集』が出版されるまでの間に一度だけ重刻されたことがある。すなわち清の顧修が刊行した『南宋群賢小集』（目次の題名「讀書齋重刻南宋羣賢小集」）がそれである。本版は、顧修による凡例「讀書齋重刊羣賢小集例」の末尾に「嘉慶六年（二八〇二）歲次辛酉七月朔日」と識され、ほぼこの頃の刊刻と見なしうる。この讀書齋重刻本『南宋群賢小集』（以下、讀書齋本と略す）の底本については凡例に次の如く説明されている。

今傳鈔本多寡不一。惟錢塘吳氏瓶花齋彙萃諸家鈔本、定爲六十四家。又據宋本增入六家、花山馬氏本增入二家、秀水朱氏本增入二家、頗稱完備。知不足齋主人、抄自汪氏振綺堂、又得宋刻校正、最爲善本。因以付梓（今の傳鈔本は多寡、一ならず。惟錢塘の吳氏瓶花齋（吳焯）の

み諸家の鈔本を彙萃し、定めて六十四家と爲す。又た宋本に據り六家を増入し、花山の馬氏本もて二家を増入し、秀水朱氏本もて二家を増入し、頗る完備と稱せらる。知不足齋主人、汪氏（汪憲）振綺堂より抄し、又た宋刻を得て校正し、最も善本と爲す。因りて以て梓に付す。

この一條から讀畫齋本は、六十四家を集成した本に宋本・馬氏（馬思贊）本・朱氏（朱彝尊）本をもつて増補した吳氏瓶花齋（吳焯）鈔本を振綺堂汪氏（汪憲）が重鈔し、さらに知不足齋主人（鮑廷博）が汪氏本を重鈔し、これに宋版による校正を加えたものを底本としたことが分かる。それゆえ讀畫齋本には、例えば「乾隆壬寅十一月十三日、宋刻校於知不足齋。□（空一格）廷博」（劉過『龍洲道人詩集』）というような鮑廷博の識語を二十六種の詩集に見出せ、また鈔本の淵源たる書棚本の陳氏原刊記も十二種に録されている（いずれも後文に録す）。今日、宋版・影宋鈔本の二種の影印本が行われ、さらに文淵閣、天津閣の四庫全書本の『江湖小集』も影印され、『江湖集』研究の根本資料が備わっているが、讀畫齋本は宋版・影宋鈔本の二種にない吳淵『退菴先生遺集』・薛師石『瓜廬詩』を収載しており、また鮑廷博による拾遺（附刻の「群賢小集拾遺」）や校正にも見るべきところがあつて、依然として資料的價値を保っている。なお讀畫齋本は、鮑廷博の鈔校本を底本にしているが、底本のままに上梓したものでなく、修正を加えている。

讀畫齋本の底本を提供した鮑廷博（雍正六年、一七二八—嘉慶十九年、一八一四）は、『知不足齋叢書』を校刻したことで知られる名高い乾隆・嘉慶時代の校勘學者、藏書家、刻書家である。現在、知不足齋鈔校本『江湖集』そのものは確認しがたい。しかし讀畫齋本に比し、鮑廷博の『江湖集』の重鈔と校正の跡を伝える識語を多く留め、原鈔校本に近いと推測し得る清鈔本を獨立行政法人國立公文書館（舊内閣文庫）の藏本中に見出した。それは江戸時代に舶載され、幕府の紅葉山（楓山）文庫に納めら

れて『乾隆四庫全書無板本』と命名された叢書所收の『江湖集』十六卷である（『改訂内閣文庫漢籍分類目錄』五六二頁著録。『乾隆四庫全書無板本』の請求番號は子九六一一、『江湖集』は第九三一—二四册所收）。小文は『乾隆四庫全書無板本』の『江湖集』に見える鮑廷博識語を紹介し、鈔録・校勘に心力を注いだ彼の生涯の一軌跡を瞥見するものである。

二 『乾隆四庫全書無板本』について

『江湖集』の鮑廷博識語の紹介に先立ち、依據本の『乾隆四庫全書無板本』について、福井保氏「内閣文庫和漢書善本解題（漢籍の部）」（『内閣文庫書誌の研究——江戸幕府紅葉山文庫の考證』、青裳堂、昭和五十五年六月、二九一頁）の解題を引用し、本書の概略を述べておきたい。

乾隆四庫全書無板本

清寫

二七六册

乾隆帝の命によつて編さんされた一大叢書「四庫全書」のうち、版本として世に流布していない書物ばかり百二十五部を取りまとめ筆寫した、いわば未刊本叢書である。紅葉山文庫の「新收書目」によれば文化四年（一八〇七）十二月に受け入れているから、ほぼ乾隆（一七三五—九六）から嘉慶（一七九六—一八二〇）初年のころに新寫、舶載したものである。「御文庫始末記」の伝えるところによれば、翌五年四月にこの書名を與え、別にその内容細目を記して檢索に便したという。内容細目は「内閣文庫漢籍分類目錄」五六〇頁に掲げられている。請求番號子九六一一。

また長澤規矩也氏は、「内閣文庫展示圖書解題」（昭和三十五年五月、内閣文庫發行。後に『長澤規矩也著作集』第四卷所收、汲古書院、昭和五十八年十二月。いま後者による。三七九頁）において、本書は「おそらく、清の業

者が、わが幕府のために、特に寫させたものである」と述べている。

『乾隆四庫全書無板本』は、國立公文書館の所蔵本が唯一であると思われるが、最近、この叢書のほぼ半分の内容を収録し、その中に『江湖集』も存在する傳本を二種知り得た。紅葉山文庫本は清寫本であるが、二種いずれも江戸期の寄り合い書きの寫本で、紅葉山文庫本の重鈔と推測される。一つは南丹市立文化博物館の小出文庫所蔵本である。これは、『南丹市立文化博物館藏 小出文庫和書目録』（南丹市立文化博物館調査報告書第一集、二〇一〇年一月）を編せられた本學日本文學專攻の中西健治教授の推挽を得て、筆者が二〇一一年二月から同文庫所蔵の漢籍の整理と編目に従事した際に見出したものである。従前、「四庫全書提要」とされていた二函一四二冊の寫本の収録内容が、『内閣文庫漢籍分類目録』五六〇・五六二頁著録の『乾隆四庫全書無板本』の第一二四冊までと同じくし、紅葉山文庫本の所収百二十五種の半數近い六十種を有することを確認し、『南丹市立文化博物館藏 小出文庫漢籍古書分類目録』（南丹市立文化博物館調査報告書第二集、二〇一二年三月）には『内閣文庫漢籍分類目録』に従って「〔乾隆四庫全書無板本〕」と改めて著録し、解題を加えた。「一」を附すのは、もと當該書に書名がないため補ったことを示すものである。解題には、書誌事項のほか、『江湖集』のごく一部分について紅葉山文庫本と對校し、小出文庫本に校正や缺字の補足が見られることなどを記した。それを以下に修改して再録する。

【校正】

第一冊

『雪坡小藁』卷二

- ① 「長至書意」詩「莫言舉世無光覺」句「光」（左旁に朱點を附す、以下省略）↓「先」

（紅葉山文庫本、誤って「光」に作る）

- ② 「寄遠詞」詩「無足何邊霜月明」句「足何」↓「定河」

（紅葉山文庫本、「定河」に作り誤らず）

『菊礪小集』

- ③ 「訪銛朴翁不遇」詩其二「桑興尋僧入翠微」句「桑」↓「乘」

（紅葉山文庫本、誤って「桑」に作る）

- ④ 「元日」詩「撓光禮數修人事」句「光」↓「先」

（紅葉山文庫本、「先」に作り誤らず）

第二冊

『梅屋吟』

- ⑤ 「關山月」詩「初連明月復嬋娟」句「初」↓「祈」

（紅葉山文庫本「祁」に作り誤らず）

- ⑥ 「結客少年場」詩「手開二石方」句「方」↓「弓」

（紅葉山文庫本、誤って「方」に作る）

- ⑦ 同詩「撓奏甘泉宮」句「撓」↓「捷」

（紅葉山文庫本、誤って「捷」に作る）

『北牕詩藁』

- ⑧ 「詠懷」詩「梧相淡秋色」句「相」↓「桐」

- ⑨ 「寄伯成」詩「今來黃葉隨」↓「墮」

- ⑩ 同詩「至寶辭雕鑿」↓「鏤」

（紅葉山文庫本竝びに誤らず）

- ⑪ 「梅花」詩「群卉皆與隸」句「與」↓「興」

（紅葉山文庫本、誤って「興」に作る）

【補字】

- ⑫ 『北牕詩藁』「木屋」詩第十一句「□□不忍替」↓「躊躇不忍替」

重鈔の際に誤字が生ずるのは避けがたく、②④⑧⑩のごとくその訂正が多いのは當然であるが（ただし誤字のままも散見される）、①③⑥⑦⑪

のように底本の誤字を校正するところが少なくないのは意義深い。⑤は校正の文字を書き誤った一時の筆誤と見なせよう。また訂正は上層に書き入れるだけでなく、當該字に朱圈を施して示す場合もある。例えば『北臆詩藁』『梅花引』詩の「風流不肯王謝儔」句には「不」字の誤衍があり、下の「不」字に朱圈を加え見せ消にする。底本の誤字を校正し、⑫のごとく缺字を補足する例を見るからには、單に底本と對校するだけでなく、別本をもつて校正したに違いないが、その際にいかなる版本が用いられたかは未だ明らかにすることを得ない。

いま一つの『乾隆四庫全書無板本』は、滋賀大學教育學部に所藏される「無名叢書一百三十一種」(全國漢籍データベースの書名標記による)である。「無名叢書」と題されたのは、叢書としての書名を有していなかったがゆえの處置であろう。底本となったであろう紅葉山文庫本にもともと叢書名がなかったため、重鈔本の滋賀大學所藏本にも叢書名が存在しなかったのである。また所收数が紅葉山文庫本を超えて「二百三十一種」とあるのは、『江湖集』の各詩集を一種として數えたためである。全國漢籍データベースは「89冊」と著録し、「第一百五冊 方泉先生詩集三卷」までの細目を挙げ、また途中の冊の缺佚を示しているが、實は途中の缺佚は全くなく、さらには第一一六冊以降、第一二四冊までも存している(書根の墨書冊次に「百二十四止」とあり、表紙に貼付するラベルにも「壹貳四冊ノ内」とある)。^⑦『醫藏目錄』一卷・『祕傳疹子心法』一卷(紅葉山文庫本の第八六冊に相當)を漏收することを除いては、紅葉山文庫本の第一二四冊までの所收書を完備する(但し冊次や冊内の所收書の配列に異同あり)。所收が『江湖集』をもつて途絶するのは小出文庫本と同様である。ただし小出文庫本に比して、抄手の倉卒の筆が目立ち、誤字訂正が頗る多い。各冊首葉に次の三種の印記を見る。「稽古館」朱文長方印、「彦藩／弘道館／藏書印」朱文長方印、「大津師範學／校書籍縱覽／所藏書之

印」朱文方印。「稽古館」は彦根藩が寛政十一年(二七九九)に創設した藩校で、のち天保元年(二八三〇)に「弘道館」と改められた。これらの印記から、この本は彦根藩校から滋賀大學教育學部の前身である大津師範學校に歸したと判明する。

『江湖集』十六卷は、紅葉山文庫本と同じく第九三冊から第一二四冊までの三十二冊に収録されている。冊次は書根に加えられた序數によるが、第九四冊の冒頭に『江湖集』の目録があつて、首行「江湖集」、次行「卷一」と記し、第三行以下に所收詩集名と總丁數を列記する。本來は第九三冊と第九四冊は順序を逆にすべきである。往時、冊次を揃える際、この目録は見落とされたようで、以下も目録通りの順序になつていない。上掲、小出文庫本の校正・補字の例については、この本は②のみ小出文庫本と等しくし、その他はすべて紅葉山文庫本と同じくする。よつて小出文庫本に較べて校正は少ないといえる。

次章に紹介するごとく、『乾隆四庫全書無板本』所收『江湖集』は鮑廷博の識語が豊富に加えられることから、底本が鮑廷博鈔校本であると容易に判断できる。このほかの所收書には、當該書についての「四庫提要」を冠し、『四庫全書』(恐らく文瀾閣本であろう)による重鈔本であることが推測されるものがある(例えば冒頭の『周易口訣義』など)。「乾隆四庫全書無板本」所收書の底本について明らかにすることは、文學學上の興味深い問題になるが、これに關しては後考に委ねたい。

三 『乾隆四庫全書無板本』所收『江湖集』の鮑廷博識語

『乾隆四庫全書無板本』所收の『江湖集』十六卷(以下、四庫無板本と略稱する)は、すべて六十五家七十六種(斯植『采芝集』『采芝續藁』、許棐『梅屋詩藁』『融春小綴』『梅屋三藁』『梅屋第四藁』、武衍『適安藏拙餘藁』『適安藏拙

餘藁乙卷」、俞桂『漁溪詩藁』『漁溪乙藁』、朱繼芳『靜佳龍尋稿』『靜佳乙藁』をそれぞれ單獨して一種と数えた)の詩集、および陳起編『增廣聖宋高僧詩選』前集・後集・續集からなる(細目を後に附録したので参考されたい)。鮑廷博の識語は、そのうちの二十六種の詩集に見出せ、また陳起・續芸父子の原刊本刊語が十三種に逐録されている。紅葉山文庫本に基づき、それらを併せて以下に列記しておく。なお讀畫齋本の識語・刊語についても附記した(詩集名下の括弧内に「第幾冊」とあるのは『乾隆四庫全書無板本』の冊次を示す。原刊本刊語は「」を加えた。ゴチック数字は讀畫齋本のみに見られるもの)。

卷一

1 高翥『菊圃小集』(第九十三冊)〔補遺〕三題四首・殘句一則(補遺、讀畫齋本未收)

〔臨安府棚北大街陳宅書籍鋪印行〕(讀畫齋本同有)

壬寅(乾隆四十七年、一七八二)十一月初三日燈下、宋刻校。

(讀畫齋本作乾隆壬寅十一月初三日鏡下宋刻校)

右菊圃詩一百九首。重見于中興羣公江湖吟藁者五十八首。江湖吟藁錄詩一百十五首、除重見此卷外、得詩五十七首、共計詩一百六十六首。

又高江村侍郎刻信天巢遺稿凡輯詩一百八十八首、除見于二集外、又多詩二十三首、共計詩一百八十九首。今于咸淳臨安志得詩四首、凡詩一百九十三首。知不足齋鮑廷博識。(讀畫齋本缺此跋)

2 鄒登龍『梅屋吟』(第九十四冊)

甲申(乾隆二十九年、一七六四)正月十二日、查初白本勘過。

壬寅十一月初四日、雨窗宋刻校。

(讀畫齋本缺前則、後則作乾隆壬寅十一月初四日雨窗宋刻校)

3 余觀復『北牕詩藁』(第九十四冊)

乾隆戊寅(二十三年、一七五八)六月、傳花山馬氏道古樓本于錢塘黃氏

廣(提行低一格)仁義學。

甲申正月十二日、查初白本勘過。再從汪西亭本校正(提行低二格)次。

乙酉(乾隆三十年、一七六五)十二月、陸鍾輝選本勘定四首。

壬寅十一月初五日、宋刻校。

(讀畫齋本缺前三則、第四則作乾隆壬寅十一月初五日雨窗宋刻校)

4 趙崇錡『鷗渚微吟』(第九十四冊)

舊鈔借失、此從郁氏本補寫。乙酉十二月初十日誌。

壬寅十二月初三日、嘉禾舟中宋刻校。

(讀畫齋本竝缺)

5 朱南杰『學吟』(第九十四冊)

甲申正月十二日、查初白本勘過。

壬寅十一月初九日、宋刻校正。

(讀畫齋本竝缺)

6 王琮『雅林小藁』(第九十四冊)

甲申正月十二日、查初白本重勘。

乙酉十二月十二日、陸氏選本勘七首。

丙戌(乾隆三十一年、一七六六)二月初七日、詩存勘過。

壬寅十一月初五日、宋刻勘。

卷二

7 陳起『芸居乙藁』(第九十五冊)

甲申正月十三日、查初白本勘過。

丙戌二月初九日、郁氏東嘯軒本重勘于蘆渚寓(提行低一格)舍

壬寅十一月初二日燈下、宋刻校。

(讀畫齋本竝缺)

8 吳仲孚『菊潭詩集』(第九十五冊)〔補遺四首、讀畫齋本未收〕

丙戌二月初九日、郁氏東嘯軒本勘于蘆渚寓舍。

仲孚字信夫、見前賢小集拾遺。詩存作吳惟信。

(讀書齋本並缺)

9 沈說『庸齋小集』(第九十五册)

甲申正月十二日、查初白本勘過。

丙戌二月初七日、汪西亭本勘過。

壬寅十二月十一日、宋刻校正。

(讀書齋本並缺)

10 釋永頤『雲泉詩集』(第九十六册)

丙戌二月初九日、東嘯軒本重勘于蘆渚寓舍。

(讀書齋本缺)

11 王同祖『學詩初藁』(第九十六册)

甲申正月十三日、查初白本勘過。

丙戌二月初八日蘆渚寓舍、從郁氏東嘯軒本勘一過。

(讀書齋本並缺)

12 陳允平『西麓詩集』(第九十六册)

〔臨安府睦親坊南棚前北陳宅書籍鋪印〕(讀書齋本同有)

乾隆癸未(二十八年、一七六三)十一月二十四日鑪鎮別業、查氏本勘一過。

丙戌正月廿八日、樊榭山房本重勘于蘆渚別業。

壬寅十一月十四日、宋刻校正。

(讀書齋本僅存第三則作乾隆壬寅十一月十四日宋刻校正)

卷三

13 何應龍『橘潭潭詩藁』(第九十七册)

甲申正月十三日鐙下、查初白本勘于知不足齋。

九月二十三日陸選本校。

(讀書齋本僅存第一則作乾隆甲申正月十三日初白菴本勘於知不足齋)

14 毛珩『吾竹小藁』(第九十七册)

〔臨安府棚北大街睦親坊南陳解元書籍鋪刊行〕(在序末、讀書齋本同有)

乾隆二十八年癸未十一月二十三日鐙下、查本勘。

壬寅十一月初五日校。

15 鄧林『皇琴曲』(第九十七册)

乾隆癸未十月初二日、從樊榭先生藏本校勘一過。

初五日早、再從趙荷村先生本是正。

十一月二十三日、查本勘一過、即趙本所自出也。

壬寅十一月十四日、宋刻校定。

(讀書齋本僅存第三則、作乾隆壬寅十一月十四日宋刻校於知不足齋)

16 許棐『梅屋詩藁』(第九十八册)

乾隆癸未十一月初三日、查本勘畢。

(讀書齋本缺)

17 許棐『融春小綴』(第九十八册)

乾隆癸未十一月初三日鐙下、查本刊(見「巫說」後、按刊字當作勘)。

乾隆癸未十一月初三日鐙下、查本勘(在尾題後)

(讀書齋本並缺)

18 許棐『梅屋第四藁』(第九十八册)

乾隆癸未十一月初三日鐙下、查本勘完。

卷四

19 陳鑒之『東齋小集』(第九十九册)

乾隆二十八年癸未十一月二十五日、查本勘畢。

丙戌正月二十七日、得樊榭先生藏丞(按丞字當作本)重校于蘆渚寓舍。

壬寅十二月初五日、舟次衫(衫字當作杉)青闌、宋刻校。宋本□上刻

剛父二字。

(讀書齋本僅存第三則、作乾隆壬寅十二月初五日舟次衫青闌宋刻校)

20 施樞『芸隱勸游藁』（第九十九冊）

乾隆甲申二月十三日午前、查本勘于貞復堂。

乾隆四十七年壬寅十一月十六日、宋刻校。

21 徐集孫『竹所吟藁』（第百冊）

乾隆二十八年癸未十一月二十五日、從查本勘訖。

丙戌正月廿八日、厲本勘于蘆渚寓舍。

（讀書齋本有一則云乾隆壬寅十一月初九日、宋刻勘於知不足齋）

22 施樞『芸隱橫舟藁』（第百冊）有批校五處

鮑云、宋刻此序、每行十八格、上空二格、一行十六字。係橫舟自／書、

最爲精雅、惜未勾摹耳。（在施樞自序末、二行每行空一格）

乾隆二十八年癸未仲冬、二十有五日、查本勘于蘆鎮。

丙戌正月廿有八日午起、厲樊榭本校于蘆渚寓舍。

壬寅十一月初九日宋刻校。

（讀書齋本竝缺）

23 吳汝弼『雲臥詩集』（第百冊）

乾隆壬午長至日校寫畢。按先生名汝弼、／他本皆同。宋詩紀事作汝式、

豈樊榭／臆改耶。秋室余集附誌。

壬寅十一月初三日、宋本校。

24 武衍『適安藏拙餘藁』（第百冊）原序勾摹

乾隆癸未十一月二十六日、查本勘于居易軒。

壬寅十一月初十日、宋刻校。

〔臨安府棚北大街陸親坊南陳解元書籍鋪刊行〕（在尾題後）

（讀書齋本竝缺）

25 武衍『適安藏拙餘藁乙卷』（第百冊）原序勾摹

癸未十一月二十六日、查本勘于居易軒。

壬寅十一月初十日、宋刻校。

（讀書齋本存後則、作乾隆壬寅十一月初十日、宋刻校於知不足齋。在尾題前）

〔臨安府棚前北陸親坊南陳解元書籍鋪刊行〕（在尾題後）

（讀書齋本亦有、在尾題空一行後）

卷五

26 高似孫『疎寮小集』（補遺）七首（第百一冊）（補遺、讀書齋本未收）

甲申正月十二日、查初白本重勘。

壬寅十一月初五日、雨窗校。宋刻止此一卷、卷首疎寮小／（低一格）

集下有卷第一三字、知所錄不止于此、而佚者多矣。

（讀書齋本缺前則、尾題後空一行有乾隆壬寅十一月初五日、宋刻校、廷博、一

行十五字）

27 葉紹翁『靖逸小集』（補遺）三首殘句一則（第百一冊）（補遺、讀書齋本未收）

甲申正月十二日、查本重勘。（在補遺前）

28 張弼『秋江煙草』（第百一冊）

壬寅十一月初三日燈下、宋刻校。（在原跋後）

（讀書齋本尾題前有乾隆壬寅十一月初三日燈下、宋刻校、一行十五字。缺貴耳

集云々五行七十八字）

29 張至龍『雪林刪餘』（補遺）一首（第百一冊）（補遺、讀書齋本未收）

〔臨安府棚北大街陸親坊南陳解元書籍鋪刊印〕（在自序後）

（讀書齋本同有）

乾隆二十八年歲次癸未十一月二十有六日、查氏本勘于蘆渚。

（讀書齋本缺）

30 杜旂『癖齋小集』〔附諸杜文〕（第百二冊）

乾隆癸未十月五日、荆樹山房（趙荷村書室）鈔本是正一過。

十一月二十六日、海昌查氏本重勘于魚（淥字之誤歟）飲軒。查

本／（提行）即趙氏本所從出也。

壬寅十一月初三日、宋刻校。宋刻止此。（竝在本文末）

(讀畫齋本本文末與尾題之間有乾隆壬寅十一月初三日宋刻校，一行十三字，缺前二則)

31 劉仙倫『招山小集』〔補遺〕詩四題五首，詞八調十首(第百二冊)〔補遺、讀畫齋本未收〕

甲申正月十三日、查初白本重勘。

乙酉十二月十四日、郁本勘。

壬寅十一月初八日、宋刻校定。

(讀畫齋本尾題後有乾隆壬寅十一月初八日知不足齋宋刻校定□(空一格)廷博、一行二十字)

32 嚴粲『華谷集』(讀畫齋本未收)

乾隆甲申上燈夜、挑燈從查初白本校一過。

乾隆辛亥(五十六年、一七九二)秋九月廿五日、從宋刻中興羣公吟藁校一過。

卷六

33 黃文雷『看雲小集』(第百三冊)

甲申二月初二日、查初白本校。

永樂大典補詩四十首、辛丑(乾隆四十六年、一七八二)七月十四日記。

壬寅十一月初八日、宋刻校定。宋刻每行只十六字、每／(提行低一格)頁仍十行。

(讀畫齋本竝缺)

34 薛嵎『雲泉詩』附小傳(第百四冊)(小傳、讀畫齋本未收)

乾隆辛巳十月廿六日、傳振綺堂本并校。(據讀畫齋本、四庫無板本未見)

無板本趙汝回序末勾摹刻印二印(讀畫齋本無)

卷七

35 葛天民『葛無懷小集』(第百五冊)

乾隆癸未九月、借汪氏振綺堂本寫□(空一格)廷博

(據讀畫齋本、在尾題後。四庫無板本未見)

36 張良臣『雪臆小集』〔補遺〕(第百六冊)〔補遺、讀畫齋本未收〕

乾隆壬寅十二月初五日、宋刻校正。

(據讀畫齋本、在尾題前。四庫無板本未見)

37 張蘊『斗野藁支卷』(第百六冊)

乾隆壬寅十一月初十日、宋刻校定□(空一格)廷博。

(據讀畫齋本、在尾題前。四庫無板本未見)

38 黃大受『露香拾藁』(第百六冊)

乾隆壬寅十一月初六日鐙下、宋刻校於知不足齋。

(據讀畫齋本、在尾題前。四庫無板本未見)

卷八

39 林希逸『竹溪十一藁詩選』

〔臨安府棚北大街睦親坊南陳解元宅書籍鋪刊行〕(在尾題後)

(讀畫齋本同有)

乾隆二十九年甲申二月十一日鐙下、查初白本／(提行)勘于貞復堂。

乾隆四十七年壬寅十一月十二日、宋刻校定。(竝在尾題後)

(讀畫齋本尾題後存後則作乾隆壬寅十一月十二日、宋刻校定□(空一格)廷博)

40 敖陶孫『詩評』(第百八冊)

乾隆甲申二月十二日、查初白本校于貞復堂。

壬寅十一月十一日鐙下、宋刻校。

(讀畫齋本存後則)

41 朱繼芳『靜佳龍尋稿』(第百八冊)

甲申二月十三日、查初白本校于貞復堂。

(讀畫齋本缺)

42 朱繼芳『靜佳乙藁』〔補遺〕一首(第百八冊)〔補遺、讀畫齋本未收〕

甲申二月十三日、查初白本校于貞復堂。

(讀畫齋本作乾隆甲申二月十三日、初白菴本校於知不足齋、廷博)

43 陳必復『山居存藁』(第百八册)

〔臨安府柵北大街陸親坊南陳解元宅書籍鋪刊行〕

(據讀畫齋本、在序後)

乾隆壬寅十一月初十日、宋刻校於知不足齋。

(據讀畫齋本、在尾題後。四庫無板本並未見)

卷九

44 林尚仁『端隱吟藁』(第百九册)

乾隆壬寅十一月十二日、宋刻校於知不足齋。

(據讀畫齋本、在尾題後。四庫無板本未見)

45 劉翼『心游摘藁』(第百九册)

〔臨安府柵北大街陸親坊南陳解元書籍鋪刊行〕

乾隆壬寅十一月十二日、宋刻校正。

(據讀畫齋本、並在尾題後。四庫無板本並未見)

46 樂雷發『雪磯叢藁』五卷(第百九册)

乾隆丙戌三月二十四日、得閑居士補抄于蘆浦寓廬／(提行低一格) 徐文

惠公集附錄有樂雷發長歌、當補入。

(讀畫齋本缺)

47 戴復古『石屏續集』四卷(第百十册)

〔臨安府柵北大街／陳宅書籍鋪印行〕(在卷四末)

(讀畫齋本同有、爲小字雙行)

卷十

48 葉茵『順適堂吟藁』甲集(第百十一册)

癸未十一月廿六日查本勘。

壬寅十一月十二日宋刻校。

(讀畫齋本並缺)

49 葉茵『順適堂吟藁』乙集(第百十一册)

乾隆癸未十一月二十六日、大雪呵凍、查氏本勘一過。查本止此、無丙

丁／(提行低一格) 諸集。

壬寅十一月十三日晨起、微雪呵凍、宋刻校。

(讀畫齋本並缺)

50 葉茵『順適堂吟藁』丙集(第百十一册)

乾隆四十七年壬寅十一月十三日、宋刻校定。

(讀畫齋本缺)

51 葉茵『順適堂吟藁』丁集(第百十二册)

乾隆四十七年壬寅十一月十三日、宋刻校。□(空一格) 宋刻丁戊二集皆

九／(提行低一格) 行行十八字。

(讀畫齋本缺)

52 葉茵『順適堂吟藁』戊集(第百十二册)

乾隆四十七年十一月十三日、宋刻校。

(讀畫齋本作乾隆壬寅十一月十三日、宋刻校於知不足齋。□(空一格) 廷博)

53 劉過『龍洲道人詩集』(第百十二册)

〔臨安府柵北大街陸親坊南陳宅書籍鋪刊行〕(在尾題後)

(讀畫齋本在尾題後)

乾隆壬寅十一月十三日、宋刻校。

(讀畫齋本作乾隆壬寅十一月十三日、宋刻校於知不足齋。□(空一格) 廷博。

在尾題前)

卷十一

54 林同『林同孝詩』(第百十三册)

〔臨安府柵北大街陸親坊南陳解元宅書籍鋪刊行〕(在劉克莊序後)

(讀畫齋本同有)

宋板原本在錢塘吳石倉家。此從趙谷林處／傳抄。海內得傳抄本者、惟

揚州馬嶸谷、天津／查心穀而已。□（空一格）此松石先生題詞、因借校錄／之。（前有林同小傳。讀畫齋本竝缺）

56 李萼『梅花衲』（第百十四冊）

〔臨安府柵北大街陸親坊南陳宅書籍鋪印〕（在劉宰序後）

（讀畫齋本同有）

〔臨安府柵北大街陸親坊南陳解元書籍鋪刊行〕（在自跋後）

（讀畫齋本同有）

57 李萼『剪綃集』上下卷（第百十四冊）

〔臨安府柵北大街陳解元書籍鋪印行〕（在尾題後）

（讀畫齋本同有）

（低三格）甲申二月十六日、查初白本重勘于貞復堂。

（讀畫齋本缺）

卷十二

58 姜夔『白石道人詩集』集外詩・詩說序（第百十五冊）（讀畫齋本缺集外詩、

收錄詩說・附錄諸賢酬贈詩、末云乾隆乙巳六月十四日知不足齋續錄）

〔臨安府柵北大街／陳宅書籍鋪刊行〕（在又序後）

（讀畫齋本缺）

59 周文璞『方泉先生詩集』三卷（第百十六冊）

乾隆癸未十一月初五日鐙下、查本勘過。（在卷一末）

乾隆癸未十一月二十三日、查本勘訖。（在卷二末）

（讀畫齋本竝缺）

卷十三

60 紹嵩『亞愚江浙紀行集句詩』七卷

嘉熙改元丁酉良月／師孫奉直命工刊行。（卷七尾題後）

（讀畫齋本同有） 讀畫齋本錄陳應申跋、四庫無板本缺。讀畫齋本後語、

四庫無板本見于書前、勾摹、缺刻印（讀畫齋本有刻印五印）

卷十四

61 陳起編『增廣聖宋高僧詩選前集』（第百十九冊）

壬寅十一月初五日、雨窗宋刻校。宋刻□上題作宋僧甲。／（提行低一

格）此所謂九僧詩集也。元有陳充序。凡一百九篇、今溢出／（提行平擡）

二十七篇。蓋所謂增廣僅此耳。惜陳序不可得見矣。（在大尾）

（讀畫齋本缺）

62 陳起編『增廣聖宋高僧詩選續集』（第百二十冊）

乾隆丙戌正月二十七日、從別本勘完、蘆渚借一軒識。

壬寅十一月初六日、宋刻校定。（竝在尾題後）

（讀畫齋本存後則作乾隆壬寅十一月初六日、宋刻校於知不足齋□（空一格）廷博

※『補遺』（讀畫齋本作高僧詩補遺）題下、讀畫齋本有汲古閣輯錄、四庫

無板本無此五字。

『補遺』末有蕭客跋（末云乙未冬初、假滋蘭堂本錄出、立春前一日、蕭

客書。按蕭客余蕭客）、讀畫齋本缺。

四庫無板本配爲前集、補遺、後集、續集。讀畫齋本爲前集、後集、

續集、高僧詩補遺。

63 吳淵『退菴先生遺集』上下卷（第百二十冊）

乾隆戊寅六月、傳花山馬氏道古樓本。

庚戌九月十三日、燈下取舊本重勘。（並在大尾）

（讀畫齋本缺）

卷十五（紅葉山文庫本、誤冊次以卷十六配于卷十五前）

65 周弼『汶陽端平詩雋』四卷（第百二十三冊）

〔臨安府柵北大街陳解元書籍鋪印行〕（在李萼序後）

（讀畫齋本同有）

乾隆癸未十月、假趙荷村太守荊樹山房本是正廷博。

（據讀畫齋本、在卷四尾題後。四庫無板本缺）

卷十六

64 趙汝鑑『野谷詩藁』六卷第六卷(第百二十二册)

乾隆國慶年、假知不足齋本校録于竹菴盒。(在卷六大尾)(讀書齋本缺)

以上、四庫無板本および讀書齋本『江湖集』の鮑廷博識語・陳宅書籍鋪原刊記を列記したが、末尾の『野谷詩藁』の識語は鮑廷博のものでなく、彼と交流親密であった趙魏(乾隆十一年、一七四六―道光五年、一八二五)のものである。趙魏(字晉齋)は浙江仁和人、「竹菴(庵)盒」はその藏書室の名である。この識語によって、四庫無板本『江湖集』は、「乾隆國慶年」に趙魏が鮑廷博鈔校本を借鈔した本、もしくははその傳鈔本であることが判明する。趙魏は、嘉慶元年(一七九六)二月、鮑廷博から『江湖後集』二十四卷も借鈔しており、今にその本が北京大學圖書館に收藏されている(劉尙恒『鮑廷博年譜』、黃山書社、二〇一〇年七月、一七三頁による)。四庫無板本の識語は、趙魏が先だつて『江湖集』も鮑廷博から借鈔していたことを伝え、二集揃えて所藏していたことも知らしめているのである。

次に鈔校の次第が把握しやすいように如上列記した鮑廷博の識語を編年してみる(讀書齋本が傳える識語は括弧を加えた。記載は序號・詩集名に止める。月日が不明の場合は當該年の末に配した)。

乾隆二十三年戊寅(一七五八) 鮑廷博三十一歳

六月 3 『北牕詩藁』・63 『退菴先生遺集』

乾隆二十六年辛巳(一七六一) 三十四歳

十月 (34 『雲泉詩』)

乾隆二十七年壬午(一七六二) 三十五歳

月日未詳 23 『雲臥詩集』

乾隆二十八年癸未(一七六三) 三十六歳

九月 (35 『葛無懷小集』)

十月二日 15 『皇琴曲』

十月五日 30 『癖齋小集』

十月(65 『汶陽端平詩集』)

十一月三日 16 『梅屋詩藁』・17 『融春小綴』・18 『梅屋第四藁』・59

『方泉先生詩集』

十一月二十三日 14 『吾竹小藁』・15 『皇琴曲』・59 『方泉先生詩集』

十一月二十五日 19 『東齋小集』・21 『竹所吟藁』・22 『芸隱橫舟藁』

十一月二十六日 24 『適安藏拙餘藁』・25 『適安藏拙餘藁乙卷』・29 『雪

林刪餘』・30 『癖齋小集』・48 『順適堂吟藁』甲集・

49 『順適堂吟藁』乙集

乾隆二十九年甲申(一七六四) 三十七歳

正月十二日 2 『梅屋吟』・3 『北牕詩藁』・5 『學吟』・6 『雅林小

藁』・9 『庸齋小集』・26 『疎寮小集』・27 『靖逸小集』

正月十三日 7 『芸居乙藁』・11 『學詩初藁』・13 『橘潭詩藁』・31 『招

山小集』

二月二日 33 『看雲小集』

二月十一日 39 『竹溪十一藁詩選』

二月十二日 40 『臞翁詩集』・詩評

二月十三日 20 『芸隱勸游藁』・41 『靜佳龍尋稿』・42 『靜佳乙藁』

二月十六日 57 『剪納集』

九月二十三日 13 『橘潭詩藁』

月日未詳 32 『華谷集』

乾隆三十年乙酉(一七六五) 三十八歳

十二月十日 4 『鷗渚微吟』

十二月十二日 6 『雅林小藁』

十二月十四日 31 『招山小集』

十二月 3 『北牕詩藁』

乾隆三十一年丙戌（一七六六）三十九歲

正月二十七日 19 『東齋小集』・62 『增廣聖宋高僧詩選續集』

正月二十八日 12 『西麓詩集』・21 『竹所吟藁』・22 『芸隱橫舟藁』

二月七日 6 『雅林小藁』・9 『庸齋小集』

二月八日 11 『學詩初藁』・62 『增廣聖宋高僧詩選續集』

二月九日 7 『芸居乙藁』・8 『菊潭詩集』・10 『雲泉詩集』

三月二十四日 46 『雪磯叢藁』

乾隆四十六年辛丑（一七八一）五十四歲

七月十四日 33 『看雲小集』

乾隆四十七年壬寅（一七八二）五十五歲

十一月二日 7 『芸居乙藁』

十一月三日 1 『菊圃小集』・23 『雲臥詩集』・28 『秋江煙草』・30 『癖齋小集』

十一月四日 2 『梅屋吟』

十一月五日 3 『北牕詩藁』・6 『雅林小藁』・14 『吾竹小藁』・26 『疎寮小集』・61 『增廣聖宋高僧詩選前集』

十一月六日 62 『增廣聖宋高僧詩選續集』・（38 『露香拾藁』）

十一月八日 31 『招山小集』・33 『看雲小集』

十一月九日 5 『學吟』・21 『竹所吟藁』・22 『芸隱橫舟藁』

十一月十日 24 『適安藏拙餘藁』・25 『適安藏拙餘藁乙卷』・（37 『斗野藁支卷』）・40 『詩評』・（43 『山居存藁』）

十一月十二日 39 『竹溪十一藁詩選』・（44 『端隱吟藁』）・（45 『心游摘藁』）・48 『順適堂吟藁』 甲集

十一月十三日 49 『順適堂吟藁』 乙集・50 『順適堂吟藁』 丙集・51 『順適堂吟藁』 丁集・52 『順適堂吟藁』 戊集・53 『龍洲道』

『乾隆四庫全書無板本』所收『江湖集』の鮑廷博校本識語について

人詩集』

十一月十四日 12 『西麓詩集』・15 『皇琴曲』

十一月十六日 20 『芸隱勸游藁』

十二月三日 4 『鷗渚微吟』

十二月五日 19 『東齋小集』・（36張良臣『雪牕小集』）

十二月十一日 9 『庸齋小集』

乾隆五十年乙巳（一七八五）五十八歲

六月十四日（58『白石道人詩集』）

乾隆五十五年庚戌（一七九〇）六十三歲

九月十三日 63 『退菴先生遺集』

乾隆五十六年辛亥（一七九二）六十四歲

九月二十五日 32 『華谷集』

識語の編年によって、鮑廷博の『江湖集』所收詩集の鈔校は、乾隆二十三年（一七五八）三十一歳から同五十六年の六十四歳まで、四十代の中斷を挟んで前後三十四年間に及ぶことが明瞭となる。鮑廷博は嘉慶十九年（一八一四）に八十七歳で卒するので、『江湖集』詩集の鈔校は、その生涯のほぼ中間期の營みであった。『江湖集』の識語は、孜孜として古書の鈔録・校勘に捧げた人生をよく象徴しているといえよう。鮑廷博の事跡は、前掲の劉尙恒氏『鮑廷博年譜』に詳しいが、『江湖集』各種詩集の識語や讀書齋本刊行時の識語についての言及が一切ない。四庫無板本の『江湖集』の利用は困難であるにせよ、せめて讀書齋本に加えられた識語は年譜中に録引して事跡に加えるべきであった。小文がその補遺となれば幸いである。なお鮑廷博が『江湖集』鈔校に用いた諸本、また四庫無板本『江湖集』と讀書齋本との比較などについては別稿に記すことにしたい。

注

- ① 『江湖集』に關する論文は、胡念貽「南宋《江湖前、後、續集》の編纂和流傳」(『文史』第一六輯、中華書局、一九八二年一月)・張瑞君「《江湖集》、《江湖前後續集》的刊行及江湖派的鑑定」(『文獻』總第四三期、書目文獻出版社、一九九〇年一月)・張宏生「江湖詩派研究」(中華書局、一九九五年一月)・費君清「南宋群賢小集」彙集流傳經過揭密」(紹興文理學院學報(哲學社會科學版)第一九卷第四期、一九九九年二月)のほか、羅鸞「《江湖前、後、續集》與《江湖集》求原」(『新國學』第八卷、巴蜀書社、二〇一〇年二月)を參考した。陳起はまた『江湖集』の選本も出版している。羅氏の論文は、陳氏父子の『江湖集』叢刻や『江湖集』選本の編刊について先行論文に修正を加え有益である。羅氏提供の修訂版に基づく會谷佳光氏の日本語譯が「江湖派研究」第二輯(江湖研究會、二〇一二年三月)に掲載されている。
- ② わが國における江湖派研究の優れた成果には、内山精也氏「古今體詩における近世の萌芽——南宋江湖派研究事始——」(『江湖派研究』第一輯、宋代詩文研究會江湖派研究班、二〇〇九年二月)があり、これに中國における研究情況も紹介されている。
- ③ 『宋名家小集』清の查岐昌跋、「國立中央圖書館善本題跋真跡」(民國七十一年(一九八八)二九四八頁)。
- ④ 『汲古閣景鈔南宋六十家集』の書名は目錄首によった。書扉には「汲古閣景／宋鈔南宋／羣賢六十／家小集」とある。本書には『知不足齋輯錄宋集補遺』『知不足齋影寫南宋八家集』が附録されている。刊年は鄧邦述の序の年による。ただし附録二種に附す陳乃乾の序は壬戌すなわち民國十一年のものである。
- ⑤ ほぼ同内容の解題は『內閣文庫百年史 增補版』(汲古書院、昭和六十一年七月)の「藏書點描」の四五三にもある(該書一五六頁)。
- ⑥ 全國漢籍データベースに漏收の書を『江湖集』以外のものも併せ左に録しておく(※は譌脱・誤衍の補正)。

第二一三三五 冊 春秋釋例一五卷 第三六・三七 冊 論語意原二卷
 第三三八 冊 孟子外書四卷・附錄 第三九一四一 冊 唐史論談三卷
 第七〇・七一 冊 程氏攷古編一〇卷 第七二 冊 洞天清祿集一卷

- 第七七 冊 長物編一卷 第八四・八五 冊 史載之方二卷
 第九四 冊 雪坡小藁二卷※
 九五 冊 梅屋詩集一卷※(融春小藁下重行)
 第九九 冊 適安藏拙餘藁乙卷一卷※
 第一一六 冊 雁翁詩集二卷詩評※
 第一二六・一一七 冊 亞愚江浙紀行集句詩七卷
 第一一八 冊 增廣聖宋高僧詩選前集一卷補遺
 第一一九 冊 增廣聖宋高僧詩選後集三卷・增廣聖宋高僧詩選續集一卷
 第一二〇・一二二 冊 野谷詩藁六卷
 第一一二 冊 退菴先生遺集二卷・瓜廬詩一卷附錄
 第一二三 冊 汶陽端平詩雋四卷
 第一二四 冊 靜佳龍尋稿一卷・靜佳乙藁一卷補遺・山居存藁一卷
- ⑦ 上記①から⑥は、讀書齋本が誤っておらず、これを校訂に用いた可能性が一つに考えられるが、讀書齋本は⑫を缺字にするので、他の參校本もあつたと思われる。
- ⑧ 趙魏については鄭偉章『文獻家通考』(中華書局、一九九九年六月)四六二・三頁參照。また趙との交流は劉尙恒『鮑廷博年譜』(本文掲出書)の乾隆三十五年から嘉慶十九年(鮑卒去の年)までにしぼり見える。
- ⑨ 「乾隆國慶年」は、乾隆帝の八十歳を祝賀する萬壽盛典が行われた乾隆五十五年(一七九〇)がふさわしいが、鮑廷博の識語が翌年に及ぶので合わない。在位周甲の乾隆六十年(一七九五)を指すか。後考を俟つ。
- ⑩ ただし讀書齋本の書前に鮑廷博は、「右南宋陳起編刻江湖羣賢小集、借鈔於汪氏振綺堂(小字雙行原注：主人諱憲、字千波、號漁亭、錢塘人)……予鈔是書、在乾隆辛巳之春(予の是の書を鈔するは、乾隆辛巳(二十六年、一七六一)の春に在り)」という。34『雲泉詩』に乾隆二十六年の識語があつて(讀書齋本)、汪憲の振綺堂本によつて重鈔し校勘を加えたこと記している。これより先、乾隆二十三年に3『北牕詩藁』・63『退菴先生遺集』を花山の馬思贊の道古樓本によつて重鈔しているが、『江湖集』鈔録の底本には殆ど振綺堂本を用いたので、道古樓本による傳鈔に言及しなかつたものと思われる。

【附記】

所藏本の閲覽・覆寫に應じて戴いた獨立行政法人國立公文書館と南丹市立

文化博物館、また「無名叢書」全冊閲覽の便宜を與えて下さった滋賀大學教
育學部圖書館、『汲古閣景鈔南宋六十家集』の閲覽を許された京都大學文學
研究科圖書館の關係各位に感謝申し上げる。なお拙文は、國文學研究資料館
宋版研究會における研究成果の一部である。

【追記】

初校中に舊内閣文庫所藏の紅葉山文庫舊藏の享和二年（一八〇二）寫本の
『江湖集』十六卷（缺卷十二以下）二十四冊を閲覽したところ、この寫本に
も四庫無板本『江湖集』と同様に鮑廷博の識語が備わっていた。享和寫本は
鮑廷博鈔校本『江湖集』と『乾隆四庫全書無板本』の本邦傳來を考察する上
に甚だ貴重である。

覆校を前にして大庭脩氏「篠崎小竹舊藏の『欽定四庫全書拾遺目錄』（大
谷篤藏編『近世大阪藝文叢談』、大阪藝文會、昭和四十八年三月）を知った。
本論文に尾崎雅嘉の『舶來書目』第五卷の「欽定四庫全書提要無板書目」は
寛政十一年（一七九九）未六番船が持渡ったこの叢書（所收五十九種）の目
録であり、舊内閣文庫所藏の紅葉山文庫本『乾隆四庫全書無板本』は、その
後に持渡って文化四年十二月に入庫した足本であることなどが論ぜられて
あった（同様の主旨は大庭脩氏編『舶載書目』（關西大學東西學術研究所、
一九七二年一月）の同氏による解題にも見える）。これによって、小出文庫
本や滋賀大學所藏彦根藩舊藏の『乾隆四庫全書無板本』は、恐らく寛政十一

年の持渡り書に基づく寫本であって、紅葉山文庫本からの重鈔ではないこと
が判明し、小論第二章「『乾隆四庫全書無板本』について」の内容に修正が
必要となった。『乾隆四庫全書無板本』に關する大庭氏の重要な論文を見落
とした不明を慙する次第である。修正は將來の機會に委ねることにしたい。
前述の享和二年寫本の『江湖集』も寛政十一年の持渡り『無板書』による重
鈔本と推測される。なお大庭氏論文は南京大學域外漢籍研究所の金程宇副教
授の指教で知り得た。金氏に御禮申し上げる。

また金氏より周生傑・季秋華輯『鮑廷博題跋集』（浙江文叢之一、浙江古
籍出版社、二〇二二年一〇月）の惠贈を承けた。これには『江湖集』の各集
の題識は全く收載しておらず、讀畫齋本『南宋群賢小集』に冠する識語を費
君清氏の論文『南宋群賢小集』彙集流傳經過揭祕』の部分引用を轉引する
のみであった。この『題跋集』より前、季秋華氏に『知不足齋序跋題記集
錄』（國家圖書館出版社、二〇一〇年一〇月）があるが、『江湖集』に關する
記載は一切なく、北京大學圖書館所藏の李盛鐸舊藏知不足齋鈔本『江湖後
集』の題識三則を『木犀軒藏書題記及書錄』（北京大學出版社、一九八五年
一二月）から録するに過ぎない。

（本学文学部教授）

序號	冊次	卷次	詩集名(不分卷本略卷數)	詩人名(凡六十五家)	備考	讀書齋叢書	宋版南宋群賢小集	影印毛鈔本
1	93	卷一	野處類稿 上下卷	鄱陽 洪邁 景廬	補遺は鮑廷博編ならん	未收	未收	未收
2			異齋小集・補遺	臨川 危稹 逢吉		第三冊	未收	第十二冊
3			雪坡小集二卷	螺川北涯 羅與之 與甫		第一冊	未收	第十冊
4			菊圃小集・補遺◎※	滄州 高翥 九萬 菊圃	補遺は鮑廷博編	第一冊◎	第二冊◎	第十二冊◎
5	94		梅屋吟・附錄◎	臨江 鄒登龍 震父	附錄は眞德秀・戴復古等題詩	第二冊◎	第四冊	第十三冊
6			北隱詩藁	盱江 余觀復 中行		第二冊◎	第十六冊	第十四冊
7			鷗渚微吟◎	開封 趙崇錡 元治		第二冊	第十六冊	第十四冊
8			學吟◎	古徐 朱南杰		第二冊	第二十冊	第十一冊
9			雅林小藁◎	古栢 王琮 中玉		第二冊◎	第二十冊	第十一冊
10			采芝續藁	芳庭 斯植		第二十四冊	第四冊	第十九冊
11			采芝續藁	錢塘 陳起 宗之	補遺は鮑廷博編ならん	第二十四冊	第四冊	第十九冊
12	95	卷二	芸居乙藁◎	雪川 吳仲孚	序文は鮑廷博編ならん	第二冊	第九冊	第二十一冊
13			菊潭詩集・補遺◎	龍泉 沈說 惟肖	序文は鮑廷博編ならん	第二冊	第九冊	第二十一冊
14			庸齋小集・附錄◎	唐栖 釋永頤 山老	跋文は補入	第二十四冊	第五冊	第十二冊
15	96		雲泉詩集	金華 王同祖 與之		第三冊	第七冊	第十三冊
16			學詩初藁	四明 陳允平 衡仲		第三冊◎	第十八冊◎	第十三冊◎
17			西麓詩藁◎	錢塘 何應龍 子翔		第三冊◎	第二十一冊	第十三冊◎
18		卷三	橘潭詩藁◎	柯山 毛珣 元白		第三冊◎	第六冊◎	第十三冊◎
19	97		吾竹小藁◎	臨江 鄧林 性之	名字下に「自號四清社友」	第四冊◎	第一冊	第十三冊
20			皇琴曲◎	壺山 許棐 忱父		第四冊	第七冊	第十三冊
21			梅屋詩藁◎	梅屋 許棐		第四冊	第七冊	第十三冊
22	98		融春小綴◎	清源 胡仲參 希道		第五冊◎	第七冊	第十五冊
23			竹莊小藁	梅屋 許棐		第五冊	第七冊	第十五冊
24			梅屋三藁	許棐		第四冊	第七冊	第十五冊
25			梅屋第四藁◎	許棐	名字下に小字「元名」とあり	第四冊	第七冊	第十五冊
26	99	卷四	東齋小集◎	三山 陳鑿之 剛父		第五冊◎	第五冊	第十五冊
27			芸隱勸游藁◎	浮玉 施樞 知言		第五冊	第六冊	第十六冊
28			竹所吟藁	建安 徐集孫 義夫		第五冊	第二十一冊	第十三冊
29	100		芸隱橫舟藁◎	浮玉 施樞 知言		第五冊	第六冊	第十六冊
30			雲臥詩集◎※	盱江 吳汝弼 伯成		第六冊	第六冊	第十六冊
31			適安藏拙餘藁◎	古汴 武衍 朝宗	序文は勾模	第六冊	第十七冊◎	第十五冊◎
32			適安藏拙餘藁乙卷◎	古汴 武衍 朝宗	序文は勾模	第六冊◎	第十七冊◎	第十五冊◎
33	101	卷五	疎寮小集・補遺◎※	四明 葉紹翁 嗣古	補遺は鮑廷博編ならん	第六冊◎	第一冊	第十二冊
34			靖逸小集・補遺◎	建安 葉紹翁 嗣古	補遺は鮑廷博編ならん	第六冊	第一冊	第十二冊
35			秋江煙草◎	河陽 張弋 彥發	名字下に「一字韓伯號無隅翁」	第七冊◎	第三冊	第十二冊
36			雪林刪餘・補遺◎	建人 張至龍 季靈	補遺は「有所思」一首	第七冊◎	未收	第十四冊◎
37	102		癖齋小集・附諸杜文◎	金華 杜旃 仲高	諸杜は旃・旗・去輕・濬之、石屏詩	第七冊	第五冊	第十二冊
38			招山小集・補遺◎	廬陵 劉仙倫 叔擬	補遺は鮑廷博編ならん	第八冊◎	第五冊	第十二冊
39			華谷集◎	建昌 嚴粲 坦叔		未收	未收	未收
40	103	卷六	看雲小集◎	盱江 黃文雷 希聲	識語に永樂大典より補詩とあり	第八冊	第十四冊	第二十冊
41			抱拙小藁	汴人 趙希一 木路一 誼父		第八冊	第十二冊	第十六冊◎
42			檜庭吟藁	丹陽 葛起耕 君顧		第八冊	第四冊	第十六冊
43			敬藁	碧澗 利登 履道		第八冊	第二十冊	第十六冊
44	104		雲泉詩・小傳	廉村 薛岫 仲止		第九冊	第十三冊	第十六冊
45	105	卷七	葛無懷小集	山陰 葛天民		第十冊	第九冊	第十六冊
46			漁溪詩藁二卷	錢塘 俞桂 晞邵		第十冊	第三冊	第十五冊
47	106		漁溪乙藁	同人		第十冊	第四冊	第十五冊
48			小山集	長沙 劉翰 武子		第十冊	第二冊	第二十冊

